

令和 4 年 5 月 11 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00291

研究課題名（和文）近世詩文集における圈点の基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on KENTEN in EDO Poetic Anthologies

研究代表者

小野 泰央（ONO, YASUO）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：90280354

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：圈点は、宋元の頃にはすでに刊本に含まれていた。ここに刊本における評点の出発点を見ることが出来るのである。明代に至って、評点はさらに頻繁に付される。一般的な評点法は、日本でも整理され、さらに細分化している。人名・地名・官名・書名・代名・年号に引く主引があり、文章の優劣に応じて、圈点の種類を変えるようになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の詩歌集における圈点は整理されていない。よって数量的に最も突出している近世漢詩における圈点の全体像を、圈点の種類・圈点の意味等の視点から整理することは、今後の日本詩歌論においてもまた近世漢文学全般においても、さらには近世書誌学においても資すること大である。この点に本研究の独自性がある。さらにその圈点の変遷によって、学際的な研究の方法論を切り開く可能性を有している。

研究成果の概要（英文）：Emphasis marks were already included in the books by the time of Song Dynasty. Here you can see the starting point of the grades in the published book. In the Ming dynasty, scoring is given more frequently. The general scoring method is also organized and subdivided in Japan. There is a main guide for personal names, place names, official names, titles, surnames, and eras, and the types of emphasis marks will change according to the superiority or inferiority of the text.

研究分野：日本漢文学

キーワード：圈点 評点

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

<1>[日本漢学史]近年の国際化の影響によって、日本古典文学における中国文学の影響についての研究は隆盛を見せてきている。20世紀半ばから継続して行われた奈良平安漢詩文の解析や(川口久雄1959年・小島憲之1968年・大曾根章介1994年・後藤昭雄1981年等)20世紀後半になって活気を見せた平安から中世への漢文学の流れは(山崎誠1993年・黒田彰1987年等)ほぼその全容が明らかにされた。20世紀末になると、五山における詩文・抄物の資料的整理およびその特性や(柳田征司1998年・堀川貴司2006年・小野泰央2011年等)近世漢詩における様態も次第に解明されつつある(徳田武1990年・揖斐高2001年等)。

<2>[近世における明代・清代詩論]近世の漢学も、松下忠によって夙に研究がされてきた(『江戸時代の詩風詩論 明・清の詩論とその摂取』<明治書院・1969年>)。以上、近世詩論には様々な要素が集約されている。ただその詩論研究において対象とされてきたのは、近世漢学者の主として詩話・随筆である。

<3>[近世詩論の新しい視点]近世には、その詩話・随筆に負けないくらいのおびただしい数の標注を始めとする注釈が制作されている。それらの評価とは別に「文字」以外の「記号」ということがその原因であると考えられるが、圏点による評価に対しての研究は、全く行われていない。僅かに管錫華『中国古代標点符号発展史』(巴蜀書社・2002年)によって基礎的な研究はされているものの、中国においてもその基礎的な作業さえなされていない。元代詩論はすでに整理され(主に張健『元代詩法校考』<北京大学出版社・2000年>)、明代詩話についても(『明詩話全編』<鳳凰・2006年>)、また清代詩話についても(『清詩話』<中華書局・1963年>)、詩論の総体はすでに把握されている。標注を含めた近世詩論と中国詩論との交渉を、解明する期は熟している。

2. 研究の目的

日本の詩歌集における圏点は整理されていない。よって数量的に最も突出している近世漢詩における圏点の全体像を、圏点の種類・圏点の意味等の視点から整理することは、今後の日本詩歌論においてもまた近世漢文学全般においても、さらには近世書誌学においても資すること大である。この点に本研究の独自性がある。さらにその圏点の変遷によって、学際的な研究の方法論を切り開く可能性を有している。< >[圏点を含んだ近世詩論研究]つまりは、近世詩論において「文字」以外にも「符号」としての「圏点」による「評価」という意思表示があった。< >[文字による研究と文字以外による研究の交渉]それは今後、「文字」以外の視点、例えば書誌的な視点や流通的な視点による作品の評価など、「文字」と「文字以外の要素」との関連など、多角的・学際的な視点での研究という広大な創造性を秘めている。主として「文字を扱った研究」つまり文学・史学などと、「文字以外の事項を扱った研究」つまり書誌学・考古学などとの双方を視野に入れた極めて学際的な研究方法を切り開くことになる。< >[現代社会における伝達方法]以上のような総括的な近世詩論の解明は、文化的に近世という時代を捉えなおすばかりか、映像や記号などで伝達する現代社会における伝達方法を相対化するだけでなく、今後、現代人における伝達方法を模索する一指標となるという点で、現代社会に資する可能性大である。

3. 研究の方法

[研究] まず初年度の前期は、中国版本における圏点は、「全国漢籍データベース協

議会」(京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター)「日本漢文文献目録データベース」(二松学舎大学日本漢文教育研究推進室)によって、日本に現存する集部の詩集数百点を拾い上げ、作品・年代によって整理した上で、年代の古い順から作品を実際に調査し、そのなかの圈点を、「、」(黒ゴマ)「、」(白ゴマ)「 」（黒丸)「 」（白丸)等の種類と、その圈点が意味する評価「対句」「警句」などの用法によって整理する。

【研究】次に、**初年度の後期**は「日本漢文文献目録データベース」(二松学舎大学日本漢文教育研究推進室)「日本古典籍総合目録データベース」(国文学研究資料館)で、近世日本において出版された準漢籍・和刻本・日本漢詩作品を、作品・年代によって整理した上で、年代の古い順から作品を実際に調査し、そのなかの圈点をその種類・用法によって整理する。

【研究】**二年目は**、中国における圈点がどのように日本の圈点へと移行してきたかを、圈点の種類・方法に関して、一つ一つの対応関係を示しながら解明する。

【研究】**最終年度には**、その中国における圈点を視野に入れながら、圈点から見た日本近世における詩集の評価、特に詩の優劣や「警句」等の句の評価について分析する。

4. 研究成果

呂祖謙『古文關鍵』・樓迂斎『崇古文訣』・謝枋得『文章軌範』に加えて、周応龍の作にも圈点を確認することが出来る。呂祖謙『古文關鍵』と樓迂斎『崇古文訣』における抹、謝枋得『文章軌範』と羅椅『放翁詩選』と方回『瀛奎律髓』における圈点は、宋元の頃にはすでに刊本に含まれていた。ここに刊本における評点の出発点を見ることが出来るのである。明代に至って、評点はさらに頻繁に付される。一般的な評点法は、日本でも整理された。陳元贊の『昇庵詩話』の評点法は、『文体明弁序説』にまとめられている「宋真徳秀批点法」と「大明唐順之批点法」の流れを受けていると考えられるが、さらに細分化している。作品全体に対する評価「全篇」「通篇」の意識は、後に、祇園南海の『鍾秀集』などに見られるものである。さらに、宇都宮遯庵の『作文楷梯』「点抹之例」にも評点についての言及がある。人名・地名・官名・書名・代名・年号に引く主引があり、文章の優劣に応じて、圈点の種類を変えるというのは、『読書作文譜』「書文標記圈点評註法」以来の意識である。さらに後には、太宰春台の『和読要領』巻下「点書法」においては、句読点について記すようになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野泰央	4. 巻 129
2. 論文標題 初期宋元の評点について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学部紀要（言語・文学・文化）	6. 最初と最後の頁 131 - 160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------